

田村氏の決断と佐々木氏の挑戦！

田村・佐々木・山岸、65年ぶり三つどもえ！

歴史に残る市長選

9月27日告示、10月4日投票の鯖江市長選。5選を目指す現職の牧野百男氏と県議の田村康夫氏(桜町3)との一騎打ちで12年ぶりの選挙戦かと思いきや、牧野氏が年齢を理由に出馬を断念。これで田村氏に決まりと自民党県連の山崎御大も安心したのも束の間、そう簡単にはいかない。

これまで選挙の度に出馬を期待されていた市議の佐々木勝久氏(熊田町)と東京出身の会社経営、山岸充氏(深江町)が名乗りを挙げ、3人が出馬表明、昭和30年の市制施行以来、実に65年ぶり、歴史に残る三つ巴の選挙戦となる。

過信は禁物か田村氏

唯一、鯖江市出身と県議としての意地を見せつける田村氏に佐々木氏がどれだけ支援を広げ対抗するか。両者に若手新人、山岸氏がどれだけ食い込めるか、注目の市長選。鯖江市にとって16年ぶりに新市長が誕生する。コロナ対策に人口減対策、地方創生等々、課題が山積する。新時代令和の新リーダーを決める重要な選挙だけに、市民は公平に候補者の声に耳を傾け鯖江市の将来を託す一票を投じていただきたい。

田村氏は42歳の若さで県議選に初当選して以来、現在5期目。平成26年6月議長に就任した他、市野球連盟会長、市スキー連盟会長、市やんしき保存協会会長など50以上も各種団体の役員を務め、万全の態勢を備える。

田村氏は「牧野市政が市民から離れている。これからの生活が不安」という市民の声が多い。市民に寄り添う政治、市民生活第一の政策が必要だと現職を批判。78歳の牧野氏に対し、60歳の若さをアピールするつもりだったろうに、牧野辞退で現れたのが、52歳の佐々木氏と30歳の山岸氏。

これからは相手に不足なしと、県議18年の実績と人脈をアピールするしかない。水津達夫前市会議長が田村氏を強力に支持するが、他の市議がどれだけ追従するか、今後の動向を注視したい。

後援会組織も盤石で、選挙期間中は大物政治家が次々と応援弁士に立つことが予想されるが、慢心や過信は有権者の反感を買う。鯖江市選挙区の県議選は前回、前々回と無投票が続いただけに、田村氏自ら市民に鯖江市の想いをぶ

鯖江市長選



山岸 充

平成2年生まれ
京都大卒
平成28年鯖江市移住
県眼鏡協会職員
地域事業主わどう代表
鯖江市深江町
30歳



佐々木勝久

昭和43年生まれ
山梨県立日川高卒
平成15年鯖江市移住
平成19年鯖江市議初当選
現在4期目
平成29年市会議長
鯖江市熊田町
52歳



田村 康夫

昭和35年生まれ
神戸国際大卒
平成15年4月県議初当選
連続5期当選
平成15年県会議長
鯖江市桜町3丁目
60歳

満を持して佐々木氏登場

一方、市議4期連続当選の佐々木氏が、満を持しての登場だ。地元は次の市長として佐々木待望論が年々強まって

つける良い機会と捉え、強力な組織選挙や票読みは前面に出さず真摯に臨むことが勝利を招く。市政の何をどうしたいのか、牧野市政をどう変えていくのか具体的に自身の言葉で訴えていただきたい。出馬会見は上滑りで何も伝わらず、熱意も感じられなかった。県議5期目、議長も経験したが、首長としての手腕は未知数だ。「強い者に媚びて弱い者には強い」では職員は付いてこないし、市民の真の声は聞こえない。

いたが、牧野氏勇退を待っていただけなのか、これまで正式な出馬の声はなく支持者は落胆してきた。落選覚悟で牧野市長に挑戦すべきではなかったか。牧野氏辞退でようやく決断したようだが、候補者の中で正式な出馬表明が最後とはいえない。一世一代の挑戦と、先手必勝で名乗りをあげてほしかったと支持者の声も。

佐々木氏は山梨県出身で、東京電力㈱に入社し、労働組合「東電労組」支部の役員を務めた経験もある。鯖江市の市議、県議を務めた佐々木治氏の子女と結婚、義父の市議選の手伝いをしたのが転機となつて政治に興味を持ち、平成13年迷うことなく鯖江市に移住。平成19年に市議選に初当選して以来、4期連続、毎回上位当選を果たし、平成29年から2年間議長も務めた。初当選以来一貫して「もつともつと鯖江市を良くしたい。このまちと市民の為に働きた

鯖江市有権者数

令和2年6月1日現在

男性 27,246人

女性 29,126人

計 56,372人

い」と議員活動の他、PTA活動、体育協会、水泳協会など役職も多く務め、杉本知事鯖江市後援会長も務める。

佐々木氏の義父、佐々木治氏は平成15年の県議選で6300票を集票したが、牧野市長が当時、小浜市副市長から県議に転身し1万3千票超、田村氏9千票と新人候補2人に敗れている。今回、牧野市長から佐々木氏後継と指名があれば当選確実かもしれないが、指名はいただけなかった。地元吉川地区の支持基盤は盤石だが、地区外、市中心部への支持拡大と市議がどれだけまとまるかがカギとなる。

市会のボス、玉邑哲雄御大の指示次第で軍配が大きく変わることも考えられる。

地元期待の星だけに、佐々木氏は決死の覚悟で頑張るしかない。票読みなど考えず、己の戦いに全力で挑むことが、有権者を引き付け票につながるであろう。

予測不可能の山岸氏

東京出身の山岸氏は、京都大学卒。東京でめがね屋を経営していた祖父の影響で、幼少期から「めがね」が身近な存在だった山岸氏は、大学在学中に産官学を巻き込み学生が地域活性化を目指してつくってお祭り「京都学生祭典」の幹部としてまちづくりに携わったのをきっかけに「地方創生」に興味を持ち、平成28年鯖江市に移住、県眼鏡協会職員になった。その後、企業支援などの会社代表として子育て中の母親の就労支援などを

手掛け、鯖江商工会青年部政策提言委員長も務めた。

鯖江に住居を構えながらも、月1回ペースで東京にも足を運ぶ。その地に根付くのは大事だが、地域の人に完全に染まりきって、同じ考え方、同じ土俵に立ってしまっただけでは、変化が起こせないが持論。牧野市政の良いところを引継ぎ、地域経済と教育に力を入れたいとする平成生まれの山岸氏。次世代を担う人物として地方自治体に貴重な人物だろうが、市長は時期尚早か。

鯖江から国を変えろという高い志をもって全国に先駆けたまちづくりに挑戦してきた牧野市長のように斬新で広い視野を持っているようだが、牧野氏以上に新感覚すぎて市民や職員が付いていけないか。東京の選挙プロが付いているので要らぬ心配かも知れないが、まずは市議、議長、副市長など政治家として経験を積んでいただきたい。

後継指名なしの理由

平成の大合併で単独を選択した鯖江市の市長に当選した牧野市長は、「みんなで作ろう、みんなのさばえ」を合言葉に、全国に先駆けたまちづくりに取り組んできた。

それでも、決して楽観できる状況ではないと、少子高齢化や地域経済の低迷に対応するため他の自治体との差別化に向けた特色あるまちづくりに取り組む一方、行政のスリム化にも力を入れ市の貯金である財政調整基金の積み増しも怠らなかつた。

県内で唯一人口が増え続けるなど多くの結果を残しながら、コロナの打撃を受ける鯖江市から身を引く悔しさは如何ばかりか。後継を指名しなかつた理由がそこにあるのではないか。牧野市長の出馬から一転、不出馬の真意は計り知れない。